



# フェローシップ・ニュース

49

## JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動報告

2009年5月から始まったJICA草の根協力事業支援型が2012年3月で終わります。それに先立ちさらなるステップアップのために、来年度の新規プロジェクトの申請準備をしているところです。

3年間で6回の渡航、派遣メンバーの数も限れた中で、当初の目標にかなり近づいているのではないかと思います。今回は現地に常駐するスタッフのいないシャトル型で行ってまいりましたが、次回では現地常駐スタッフを派遣したいと考えております。

このプロジェクトでは貧困層の地域でARM (=アドイクション・リハビリ・ミーティング) を継続的に開催することを目指してきました。現在では、ケソン市のタタロンにおいて地域NGOとの協同型のARMと、マカティ市において行政との協同型のARMを実施しています。マカティ市でのARMは、本年8月5日にMADAC (Makati Anti Drug Abuse Council=マカティ薬物乱用防止委員会) において調印式が行われ、10月に第1回が開催されたところです。調印式では、マカティ市の行政関係者、ロータリークラブ(マカティ市と私たちのプロジェクトとの架け橋となってくれました)、FWC代表リッチー氏、JICAフィリピン事務所職員などが参加し、関係者間でARMの理解を深めるとともに、全面的に協力しようという協議が為され、合意書が締結されました。



8月5日に行われた調印式の様子 MADACにて

### このプロジェクトの概要は以下の通りです

事業名: マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業  
 実施機関: 3年間(平成21年5月~平成24年3月) 対象地域: フィリピン マニラ市  
 受益者層: 依存症者本人とその家族、その他ワークショップ参加者等約200名

#### 上位目標 (Overall Goal) :

マニラの貧困層の薬物依存症者の回復プログラムとしてミーティング (ARM) が継続的に円滑に行われ、多くの薬物依存症者が回復につながる。

#### プロジェクト目標 (Project Purpose) :

マニラの貧困層に薬物依存症者のためのミーティング (ARM) が開催される環境が整う。

#### 成果 (Output) :

- 1 支援が必要なフィリピンの貧困層の現状を理解しそのためのネットワークが構築される。
- 2 コアとなる人材が育成される。
- 3 貧困層の地域に薬物依存症の理解とミーティング (ARM) の必要性が認識される。
- 4 ミーティングのテキストが完成し使われるようになる。

#### 活動 (Activities) :

- 1-1 フィリピンの刑事司法システムについて調査する。
- 1-2 地域での社会資源について調査する。
- 1-3 貧困層の薬物依存症者が多くいる地域の現状を調査する。
- 1-4 貧困層の薬物依存症者の回復のためのニーズを調査する。
- 2-1 コアメンバー5名を選定する。
- 2-2 コアメンバーの本邦研修を2回実施する。
- 3 ミーティング (ARM) を開催する。
- 4 ミーティング・ハンドブックの作成。

特定非営利活動法人  
 アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日  
 2011年11月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

#### 目次 :

JICA & APARI フィリピンプロジェクト活動報告	1
韓国の薬物依存の現状と課題... チョウ・ソナム氏	3
海外旅行モニターの落とし穴... ヒカル(仮名)	5
入寮者からのメッセージ... Tim	6
アパリフォーラム案内 リハビリ・バレード報告	7
アパリからのお知らせ	8

# JICA & APARI フィリピンプロジェクト

## 第6回派遣(2011/10/23~29)報告

第6回派遣は、本プロジェクトにおける最終渡航になります。派遣メンバーは、近藤恒夫、三浦陽二、山本大、尾田真言、古藤吾郎の5名に加えて、三重ダルクの市川岳仁、精神保健福祉士(天久台病院)の進藤俊明が参加しました。

### <第6回渡航スケジュール>

- 10/24(月)午前: JICAフィリピン事務所にて打合せ  
午後: ファミリー・ウェルネス・センターにて打合せ(写真)
- 10/25(火)午前: 保健省、DDBとの会合(写真)  
午後: 関係者ミーティング(写真)
- 10/26(水)午前: MADAC、ロータリークラブとの会合(写真)  
午後: カインタ地区の教会訪問(写真)
- 10/27(木)午前: タタロンでのARMミーティング視察(写真)  
午後: MADACでのARMミーティング視察(写真)
- 10/28(金): フィリピン大学訪問(写真)



ファミリー・ウェルネス・センターにて打合せ



大統領直轄のDDB(危険薬物委員会)及び保健省との会合の様子  
首都圏マニラに関わらず、フィリピン国内の貧困地域における薬物問題の現状や、ARMを継続可能とするための具体的な取り組みについて話し合いを行った。



ディナーミーティング  
リッチー氏の父親も参加し、治療をしながら収入を確保する何かよい方法はないか? 農作業はどうだろうかなど活発な意見交換があった。

MADAC(マカティ薬物乱用防止委員会)、ロータリークラブとの会合の様子  
MADACスタッフ、元MADAC委員長で、現マカティ警察署長のサントス氏、ロータリークラブの代表者等の参加のもと、ARMを今後継続していくために、MADAC、ロータリークラブ、そしてFWC及びAPARIが協働で取り組んでいくことを話し合った。また、ロータリークラブのカニサレス氏は、フィリピン国内のさまざまなロータリークラブに発信し、さらなる拡大を目指したいと語った。



カインタ地区の教会' Hope for the World' を訪問  
将来的にARM開催の候補地。次回のプロジェクトに向けて調整中。



フィリピン大学のエスタシオ准教授を訪問



### ARM開催状況

- タタロン: 第2第4木曜日10時  
場所: タタロン・ラーニング・センター
- マカティ: 最終金曜日14時  
場所: MADAC マカティ中央警察署

タタロンでのARMの様子  
現地NGOスタッフにインタビューしたところ「ミーティングを通してコミュニティーが変わってきたこと。地域には問題を抱えていた人が溢れていたが、暴力的な人がそうでなくなったり、服装が変わってきたり、スタッフにとっても怖い存在ではなくなってきた。」と語った。フィリピン大学のエスタシオ先生によるARMの有効性についての評価・研究も始まっている。また、ARMのコアメンバーを通して、参加者たちとフィリピンのNAMメンバーとの交流が生まれ、タタロン地区でNAMミーティングが立ち上がりました。現在、毎週土曜日に開催されている。



マカティ市での2回目のARMを開催している様子  
9/30からMADACで始まったARMが今回はマカティ中央警察署の会議室で行われた。参加者は約30名。さまざまな薬物を使ってきたなかで回復プログラムにつながり、止め続けることができていると話す参加者たちの笑顔がとても印象的だった。

国際犯罪学会報告より  
「韓国 の 薬物 依存 の 現状 と 対策」

釜谷国立病院 チョウ・ソンナム院長

私は韓国の釜谷(ブコク)国立病院で働くチョウ・ソンナムと申します。私の病院は韓国でも唯一、精神科で薬物依存に対する治療プログラムを行っています。まず、韓国の薬物乱用の歴史について説明します。1950～60年代はアヘンとヘロインが主流で、1957年に麻薬取締法が作られました。1970年代はメタドン、バルビツール、マリファナが主流で、1970年に依存性薬物取締法、1976年に大麻取締法が作られました。この時期は歌手や俳優の間で大麻が流行り、多くの芸能人が大麻使用で逮捕されました。1980年代に入ると、覚せい剤、鎮痛剤、シンナーや接着剤、ガソリンなどの化学物質が主流となり、1980年に向精神薬取締法、毒物取締法が作られました。そして、1990～2000年代には、コカイン、ヘロイン、エクスタシーが主流となりました。2000年に作られた麻薬及び乱用薬物取締法はこれまでの麻薬、向精神薬、大麻に関する取締法を一元化したもので、病院で治療を受けている薬物依存症患者について医師に課せられていた通報義務がなくなりました。自主的に治療することを促進するためです。

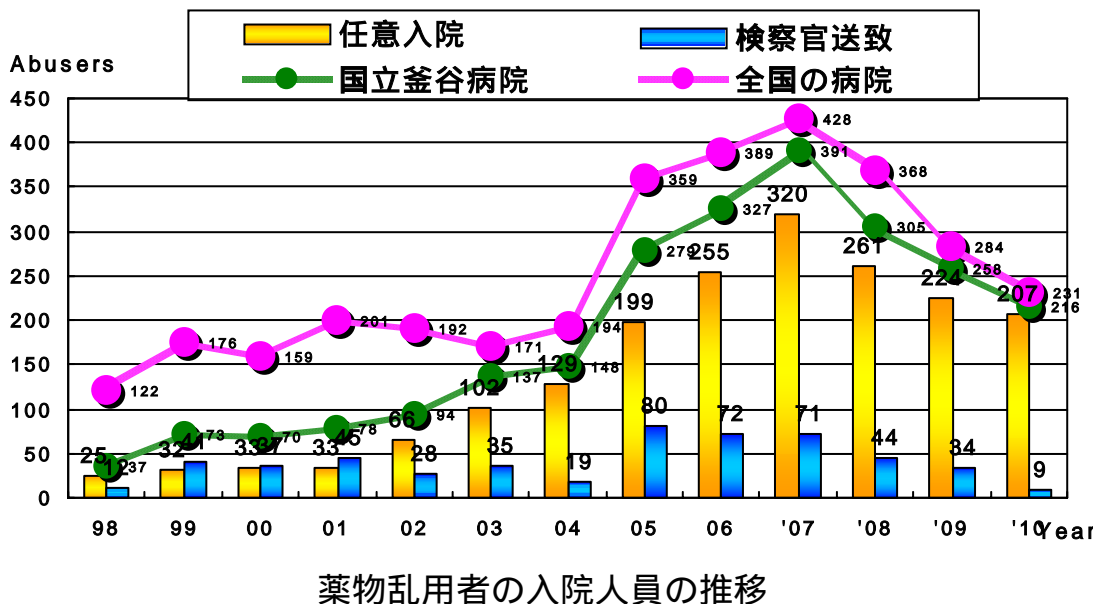
薬物乱用の現状を説明しますと、1999年以降、薬物事犯は毎年1万人を超えています。政治家の多くは韓国を「安全な国」と考えていましたが、薬物に関しては「安全な国」から「危険な国」に姿を変えたと言えます。使用者も増加していて、国外からエクスタシーやLSDなどいわゆるクラブドラッグといった新たな依存性薬物が流れ込んできています。また、使用者層も拡大していて、ビジネスマン、主婦、青少年などにまで広がっているほか、全身麻酔剤を乱用する医療関係者も増加しています。国外への旅行の増加に伴って密輸も増え、インターネットで取引をするケースも増加しています。覚せい剤が最もよく使用されていて、特に労働者層に広がっています。薬物事犯のグラフを見ると、麻薬ではアヘン使用について「薬物乱用」ではなく文化だと考えている高齢者層が大多数を占めています。地方では祭りなどでアヘンを使うことが多く、彼らは違法だとは知らなかったのです。向精神薬で最も多いのは覚せい剤で中国からの密輸が大半を占めています。2003～2006年の間は総数が減少していますが、これは韓国でマフィアの取り締まりが行われた上、SARSの流行に対する警戒で中国からの密輸が激減したためで、2007年には再び総数は増加しています。

薬物事犯の特徴についてみてみると、19歳以下はアヘン使用はゼロで、向精神薬と大麻が多い一方、アヘン使用は60歳以上が6割を占めています。全体としては常習犯が40%以上で、全体の37%は無職、87%の人々の教育レベルは低く、男女比は6対1となっています。治療や保護を受けている依存症患者についてみると、2002年を境に司法機関からの送致は減少傾向にありますが、自主的な入院は増加しています。2005年に突然司法機関からの送致が増えますが、治療ではなく、保護としての要請で、その後は減少しました。

国内には依存症を受け入れる病院が11ヶ所ありますが、特別な病棟はありません。釜谷国立病院は韓国で唯一薬物依存治療の為の病棟(200床)がある病院です。依存症患者のうちおよそ90%が釜谷で治療を受けました。

2010年の司法機関からの送致は激減しています。司法関係者が逮捕・起訴を優先しているためと見られますが、治療に効果はない、病院は使用者をかくまっている、犯罪者を隠しているなどネガティブに捉えていて、治療につなげるのが難しい状況です。我々も話し合いはしていますが。覚せい剤使用者のうち、精神病患者は、そうでない人に比べて薬物の使用開始時期が早く、22.7歳と27.1歳という違いがあります。また、使用が止まるまで、精神病患者は11.1年。そうでない人は10.3年という違いもあります。

多くの薬物乱用者は治療を受けていません。薬物使用については疾病調査がないため、これはわれわれの推計ですが、国内に30～100万人の使用者がいると見られます。薬物事犯で逮捕される人は年に1万3千人以上で、そのうち70%は薬物の使用者です。刑務所には3500人の依存症患者がおり、これは入所者の約7%を占めますが、特別な治療施設はありません。私の推測ですが、治療を受ける薬物依存症患者というのは年に400～2000人の間、つまり使用者の0.1%に過ぎません。治療につながるルートとして少なくとも3パターンがあり、保護としての治療の命令が年に300～400人、治療および身柄拘束の命令が50人、40～50時間の講習への参加命令が1,000人ほどです。そのほか、どの医者が治療を行っているか把握していませんが、民間のクリニックで年に1,000人かそれ以下の人が治療を受けていると思われる



チョウ・ソンナム氏

質疑応答から  
保健福祉部 (Ministry of Health and Welfare) への通報義務がなくなったということ。韓国では、医師の守秘義務が優先されているので、当初から警察への通報義務はない。



釜谷国立病院



釜谷国立病院内にある薬物依存病棟(200床)

政府による治療類型には、「医学的な治療と保護」「医学的な治療と身柄拘束」「講習への参加」があります。「医学的な治療と保護」とは、自主的な委託が基本ですが、自首してきた場合などに検察官が起訴猶予して治療を行わせる場合や、本人やその家族が治療に来る場合があります。期間としては約1ヶ月の診断と、2ヶ月以下の治療を行います。私の病院も含めて政府による治療は無料で、12の病院がこのような治療を行っています。

次に、「医学的な治療と身柄拘束」についてですが、これは医療観察法という法律があり、裁判所の命令で薬物使用の刑事被告人に適用されます。期間は3ヶ月以上、国立の医療観察法病棟のある病院で行われます。病院は精神病や薬物依存の刑法犯向けで、法務省が管掌しています。私は5年ほどここで働きましたが、この病院で始めて薬物依存の問題を知りました。「講習への参加命令」というのは、裁判所が執行猶予判決を言い渡したり、検察官が起訴猶予処分する時に命ずるものです。講習は薬物依存についてで、40～50時間にわたります。不定期の尿検査も行われます。講習は主として動機付けを目的としています。

韓国のNAについては、私は医療観察法病棟のある病院に勤めているときに患者を通じて知ったのですが、1996年の時点では、月に1回、毎週第2火曜日にその病院に入所している依存症患者がミーティングを行っていました。2004年「NA KOREA」として発足し、毎週火曜午後7時に50人ほどの依存症患者が参加していました。そして2005年、正式にNAに登録しました。2006年に「第1回NAコンベンション・日韓合同大会」が釜山(プサン)で行われました。キャッチフレーズは「It's OK」、韓国からはNAメンバー100人、日本からは50人が参加しました。2007年には第2回がソウルで開かれ、キャッチフレーズは「Not Alone, All Together」。韓国からは150人が、日本からは40人が参加しました。2008年と2009年はコンベンションが開かれませんでした。なぜならNAのリーダーがリラプスで逮捕されてしまったからなのですが、2010年11月6日・7日に第3回がソウルで開かれました。その時のキャッチフレーズは「Just For Today」でした。

現在、韓国には5つのNAがあります。ソウル、仁川(インチョン)、楊州(ヤンジュ)、釜山と釜谷国立病院です。左の写真は2004年のコンベンションのお別れパーティーのものです。

われわれは薬物依存の脳への影響などについてこれまで調査研究を行い、4つの論文を発表しています。ここまでの結論として、まず疫学的な調査の必要性があげられます。薬物依存に関する疫学的な調査が無い為に、われわれは韓国に依存症の患者がどのくらいいるのかを把握していません。その為、韓国政府は薬物汚染の深刻さを理解していませんし、治療やリハビリのための取り組みを行っていないのです。また、ドラッグコートも必要です。薬物依存の治療とリハビリに関し、法システムと医療システム間の協議やミーティングは行われていません。ですので、治療に関する政策は限定されています。

検察側は治療より逮捕や刑務所内処遇を好みます。我々は治療の効果についてもっと話し合うべきで、裁判所が治療を受けるよう命じるという手続きも必要だと考えています。裁判所命令であれば公正さを保てます。さらに、刑務所内での治療プログラムも必要です。今年、刑務所での治療プログラムは8ヶ所の刑務所で試験的に週1度2時間の授業を3ヶ月行う、という形でスタートしましたが、期間は延長すると思われます。ほかの刑務所にも広がるでしょう。刑務所内にもシステム化された治療プログラム、例えばTC(セピューティック・コミュニティ)など、治療のための設備が必要です。このほか、NAやハーフウェイハウスもさらに必要です。現在、韓国にはNAのグループが5つ、ハーフウェイハウスは1ヶ所しかありません。NAの役割は今後さらに拡大するでしょうし、DARCのようなリハビリ施設も必要とされています。来年にも釜山にDARCを作ろうとする動きがあると聞いています。

最後に、薬物依存について研究する国立の研究機関が必要です。私は今年の9月から大学の社会福祉学部に移り、薬物依存のリハビリなどについて講義を行う予定で、大学病院でも患者の治療にあたります。また、国立病院では薬物依存専用のベッド200床を改装中で、今後2～3ヶ月で再開する予定で、薬物依存に関する教育を受けた職員、特にリハビリの専門家を配置する予定です。

私はNAなど医療とは別の機関が重要だと考えていますし、ハーフウェイハウスも数を増やすべきだと考えます。もっと日本で行われている活動について出来る限りあなた方から学びたいと思っています。

## 1st Korea-Japan N.A. Convention, 2006



2004年コンベンションのお別れパーティー



## NA Korea, 2004



## 海外旅行モニターの落とし穴 -運び屋にされた私の体験から-

ヒカル(仮名)

私は今、覚せい剤取締り法違反と関税法違反の罪で起訴され、控訴中の身です。

今回、私がこの事件を起こしてしまったきっかけは、昔から付き合いのある友人に「タダで海外旅行のモニターに行かないか？ちゃんとお金ももらえる。」と誘われたことでした。今になって考えれば「そんなうまい話おかしいだろ」と思えるのですが、その頃の私は専門学校を中途退学し、アルバイトもせず、母と毎日お金のことで喧嘩をする日々で、母に文句を言わないためにまとまったお金が欲しくて「行く」と返事してしまったのです。

しかし、その後友人から紹介された海外旅行の会社の人から詳しい話を聞いていくと「ん？」と思うことが多々あり、しかも「実は、小切手を運んでもらいたいです。」と言われたのです。さらに「小切手は盗まれたら困るのでスーツケースのどこかに隠してあります。」「だから海外でスーツケースを貰ってきてください。」と言いついたのです。私は、その話を聞いてすぐ紹介者である友人に相談したのですが、友人に「俺の友達もう5回くらい行ってるから」「楽しかったって言ってたよ。」と言われ私は安心してしまったのです。そして私は、地元の友達を誘い2人で海外に発ったのです。

海外に到着してすぐ呼び出されて1つ目のスーツケースを受け取り、翌朝、また呼び出されて2つ目のスーツケースを受け取りました。

そして最終日、私たちはホテルをチェックアウトしてスーツケースを持ち女性の泊まっているホテルに行きました。そこでみんなでお茶を飲んだり、お菓子を食べながら帰る支度をしていました。そのとき、女性が私達に渡したスーツケースに何かスプレーをかけたのです。私と友達は訳が分からずその光景を黙って見ていました。そして、私が「それ何？」と聞くと女性が「犬よけ」と答えたのです。

私は「小切手は紙なのに、何で犬よけ？臭いなんてないんじゃないか...」と不安になり、女性に「これって中身小切手だよ？」と聞いてしまいました。すると女性はすごく驚いて「何言ってるの!?クスリだよ!!」と言ってきたのです。

私は頭の中がぐちゃぐちゃで何と言っているのか分かりませんでした。一気に色んな感情が溢れてきて、体が自分のものじゃないように感じました。何も話すことができない状態の私たちに女性は「大丈夫だから、今回はおとなしく運びな」「空港のポイントごとに見張りがいる」「この組織は信用できるから」「運ばなかったら50万くらい罰金払わなきゃだよ」とたたみかけてきたのです。私は一人になりたくて、トイレに行き便座に座って冷静になろうとしました。しかし、出発前に住民票や戸籍謄本を渡していたので運ばなかったら組織の人が家にきてしまうかもしれない、それに50万なんてお金すぐに用意できない、とにかく今すぐ家に帰りたい、だから今回は言うことを聞こう、そう思ってしまったのです。

女性はホテルから空港の入り口まで一緒に来ました。そして女性の指示したタイミングで空港に入りすぐにチェックインをして荷物を預けました。日本に着くまでの間、私は不安で一睡もできませんでした。友達とはこの話題には触れぬように当たり障りのない会話をしていました。

そして日本に着き、荷物を受け取り税関を通過しようとしたところ、職員の質問に対する私たちの対応や、旅行期間の短さ、そして以前密輸に使われたスーツケースと同じ型ということで何度もエックス線検査をされ、スーツケースを壊され、そして大量の覚せい剤が出てきて私と友達は逮捕されたのです。

当時19歳だった私は留置所から少年鑑別所に行き少年審判で刑事処分相当とされて、拘置所に移送されましたが、海外で20歳の誕生日を迎えた友達は、そのまま拘置所に移送されてしまいました。

拘置所に移るまで私は私達を騙した組織の人達を恨んでいました。しかも私を誘った友人の供述調書を読み、「安心させる為に友達が5回行ったと嘘をついた」と知ったときはショックで体に力が入りませんでした。しかし、拘置所に移ってから、母との面会や手紙のやりとりをしているうちに「全て私自身がいけなかった」ということに気付きました。何も考えず軽率な行動をとってしまったことが全ての始まりだったのだと気付いたのです。

そして何より、密輸が失敗に終わって良かったと思えました。もし成功していたら、大量の覚せい剤が日本に出回り誰かが死んでいたかもしれない、犯罪組織が何億もの大金を手にして更に密輸や犯罪が増えてしまっていたかもしれない。恐ろしくて身体が震えました。

今、運び屋として使われるのは、一般の人で犯罪とは無縁の人などが多いらしく、その中には恋愛感情をもたせて利用する「ラブコネクション」というものもあると聞いています。しかし、運び屋が捕まり全て正直に話しても結局組織のトップまでは繋がらず、利用された運び屋や、下っ端の人間のみが重い刑を言い渡され、一番罰せられなければならない犯罪組織のトップはまた違う一般の人を巻き込み密輸を繰り返しているのです。

私は、今回の事件で自分の未熟さに気づき、恥じました。そして、私と同じような経験をもう誰にもさせたくないと思いました。私のように薬物の恐ろしさを知らず密輸に関わり、もしそれが成功してしまったら、きっとたくさんの人達が依存症の被害に遭うことになるでしょう。

薬物使用については、小・中学校のときに学びましたが、密輸については詳しく対策を聞いたことがありません。もし、怪しい話があっても関わってはいけません。万が一、このような状況に巻き込まれてしまったら、私は母のもとに帰ることで頭がいっぱいになってしまいましたが、落ち着いて、日本の空港で税関を通過する前に、係官の人に話したり、警察に駆け込んで事情を話してください。少なくとも信頼できる親族に相談しましょう。脅しに負けず、自分の身を守る為にも正しい判断を見失わぬようにしてください。

私は今、保釈の許可が下りDARCのミーティング見学をさせてもらったり、色々な施設に行きDARCの活動を近くで見させてもらっています。そして、DARCのみなさんと会うたびに必ず思うことは「私のような人間がいるから苦しんでいる人がいる」ということです。

これ以上被害者の方を増やさない為にも、犯罪組織のトップを捕まえてほしいと私は思います。そして、どんな理由があるにせよ、密輸に加担してしまった私は、これから先、一生、今回の過ちを忘れることなく、薬物依存という大きな障害と向き合う方々のお手伝いができるようになりたいと思っています。

ヒカルさんは前科前歴なし。3泊5日で中東の某国に乗り継ぎで行き、末端価格3億円以上の覚醒剤を運んでできてしまった。

第一審懲役2年6月(求刑5年)の実刑判決を言い渡され、現在控訴中。



## アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

## 「The Story」

Tim

自分が薬物と接する事となったのは、21才の時でした。アメリカカリフォルニア州のパークレーという所へ留学する事が決まり海外生活をする事になったのです。自分が行った場所は学生の街で、ほとんどの住民が私のような留学生であったり地元の大学生がほとんどでした。週末は必ずみんなで集まりパーティーを開き楽しみました。その時みんなが当たり前のようにマリファナを吸っていました。自分もはじめは少々の抵抗はあったものの、好奇心と「みんなが吸っているからいいや・・・。」という気持ちで自分もマリファナを吸うようになったのです。

はじめは、何が何だかわからない感じだったのですが、数を重ねているうちにマリファナでの快楽を味わえるようになり、自分は完全にマリファナにはまってしまいました。それからというもの、1年間365日、毎日欠かさずマリファナを吸い続ける日々が始まったのです。マリファナを吸うと何かに集中する事が出来るので、学校のテストの時や提出するレポートを作成する時も必ずマリファナを使用するようになりました。日々の生活の中でマリファナが欠かせない物質となったのです。そんな生活を1年位続けていくうちにマリファナ以外にも何か別のドラッグをやってみようという強い好奇心が自分の気持ちの中で起こりました。そこで出会ったドラッグがコカインでした。コカインはマリファナより何倍も気持ち良く、快楽も何倍も強いものを味わう事が出来ました。しかし、コカインはマリファナよりも何倍も常習性が強く常に体に入れていないといけない状態になり、自分は完全にコカインの常習者となってしまいました。今になって考えると自分が薬物に完全にはまっていたのはその時だったと思います。このような状態が続きドラッグに浸った生活をしていると自然に犯罪にも手を出すようになり、最後は日本に帰らざるを得ない状況になってしまい、仕方なく帰国の道を余儀なく選んだのでした。

日本に帰り、縁あってある女性と知り合い、結婚して子供も一人設けて幸せな生活を続けていたのですが、気持ちの中ではドラッグの事がまだ忘れられず、また再びドラッグに手を出してしまいました。コカインの代用品として覚せい剤に手を出してしまいました。当然の成り行きとして生活は上手く行かず、離婚をする事になってしまいました。もうそれからは、毎日、毎日、覚せい剤を使用し続け最後は2回も警察に逮捕されて、とうとう刑務所へ行く結果となってしまいました。まさに人生、最悪の状態に落ちてしまいました。刑務所で服役している時に、母親が面会に来て「もうあなたの事は手に負えないので、刑務所を出たら家には帰って来ないでダルクへ行きなさい。」と言ってきました。それまで自分はダルクがどんな所か知らなかったのが不安な気持ちでいっぱいでした。2年10月の刑期を終えて、自分は藤岡ダルクに入寮する事になったのです。

自分にとっては、生まれて初めての30名以上の人との共同生活なのではじめは、戸惑いと不安感で人と話す事も出来ず、当初は常に一人で孤立した生活が続き、しかも自分は刑務所で睡眠薬と精神安定剤を毎日17錠も2年近く飲み続けていたので完全に頭がボケてしまい、他の仲間とコミュニケーションする事が全く出来ず、仲間から話しかけられても返事もする事が全く出来ませんでした。自分はこれから一体全体どうなってしまうのだろうかという不安と絶望でいっぱいでした。しかし4ヶ月位で身体から今まで飲み続けていた処方薬が抜け出て、段々と仲間と話が出来るようになり、団体生活にも慣れ親しむように変わっていききました。施設での役割も、みんなの食事を作る役割になり、仲間と共に協力して食事当番の仕事をするようになりました。自分はアメリカにいた時から料理が好きで毎日やっていたので慣れているせいもあってか、楽しんで仕事が出来ました。そこで感じた事は、仲間とフェローシップを持つ事は自分がアディクションから回復する為に必要不可欠な事であるという事です。我々は、同じアディクションという病気を抱えていて、回復したいと思っている目的を持っている仲間の集まりです。自分以外にもアディクションに苦しんでいて、そこから解放されたいと願っている人

## 書籍のご案内！

アパリ発行  
「Born・Again  
(ボーン・アゲイン)」  
体験談 販売中！

2005年5月に第2版が発売になりました。体験談が13人分収められています。アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円  
(会員価格:1,000円)

お申込はメールかファックスで  
FAX：03-5830-1791  
メール：info@apari.jp  
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お申込下さい。

が他にもいるんだという現実を身近で感じられることで自分の気持ちも楽になるし、自分の回復をしなければならぬのだという気持ちが自分自身の中で生まれてくるのが強く感じられるようになってきました。仲間の存在は自分にとって大変重要だと思えるようになってきました。

今までは、自己中心的で利己的だった自分が毎日受けるプログラムや、ここでの仲間たちとの共同生活を通して、自分に欠如している点が見えてきて改善しようという気持ちが持てるようにまで変化してきました。人への思いやりや配慮が我々アディクトにとって一番欠落していた部分だという事がわかりました。これからは仲間と大いに分かち合いフェローシップを高めていこうと思います。

## アパリ13周年記念フォーラム

### APARI&JICAフィリピン・プロジェクト報告会

日時：2012年2月22日（水）13時～17時（開場12時半）  
場所：聖イグナチオ教会 1F テレジアホール  
対象：アパリ会員、アパリ・ダルク関係者の方、国際協力に関心のある方など  
参加費：無料 申し込み：不要  
内容：詳細は決まり次第ホームページに掲載いたします。

懇親会：17時半よりテレジアホールにて  
参加費：2,000円  
アトラクション：日本ダルク アウェイクニングハウスによる琉球太鼓ほか

## 第2回リカバリー・パレード

### 「回復の祭典」無事終了！

10月9日（日）秋晴れの中、第2回リカバリーパレードは無事終了しました。今年は新宿文化センターで午前中にイベントが行われ、それが終わると同時に、4つの隊列に分かれ歩きだしました。最初の隊列の先頭には日本ダルク アウェイクニングハウスによる琉球太鼓の演舞があり、それに続いてベリーダンス隊の華やかな踊りと続きました。

一番最後の隊列は、テレビや新聞等に顔が映ってしまうことに抵抗のある方のために配慮した編成となっていました。パレードを行うにあたり交通の警備にあたられた多くの警察官の機敏で優しい対応が印象的でした。

沿道からは多くの人たちが、何のパレードだろうと不思議そうに眺めていたり、携帯で写真を撮っている人もいました。

今年の参加者は昨年より増え約700人でした。

また、来年もパレードは続く予定です。今回参加されなかった方もぜひ一緒に歩いてみませんか？



新宿文化センターのステージではバンド演奏もありました。



アウェイクニングハウスによる琉球太鼓隊



ベリーダンス隊も今年は人数が増えました。



様々なメッセージを書いた横断幕を持って歩いています。

## DVD発売！！



「ダメ。ゼッタイ。」だけでは防げない！  
青少年に贈る薬物依存者からのメッセージ

薬物乱用防止啓発視聴資料として、DVDを制作しました。実際に薬物の使用を経験した依存者の体験談を通して、薬物が人に与える影響をわかりやすくご理解いただけます。学校、福祉事務所、児童相談所等でご活用ください。

定価：5,000円 38分  
お申込みは日本ダルク本部まで。  
：03-3891-9958  
FAX：03-3891-9959

「リカバリー・パレード」とは「アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症や統合失調症・うつなどの心の病、生きづらさ」から回復している本人、家族・友人、関係者、そして一般の賛同者が新宿に集まって「回復」を喜び祝うパレードを行い、一般の人たちに回復の姿をアピールするイベントです。



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

**アパリ東京本部**

〒110-0014  
東京都台東区北上野2-2-2  
電話：03-5830-1790  
FAX：03-5830-1791  
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター  
(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313

入寮費：月額¥160,000  
(初月のみ¥175,000)

\*生活保護の方も可能  
入寮条件：薬物依存症から回復及び自立をしようとしている本人。男性のみ。年齢制限はありません。  
入寮期間：個人により差があるので、話し合いながら決めていきます。



ホームページもご覧ください  
<http://www.apari.jp/np/>

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成23年11月1日発行  
定価 1部 100円

**<アパリの司法サポート>**

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

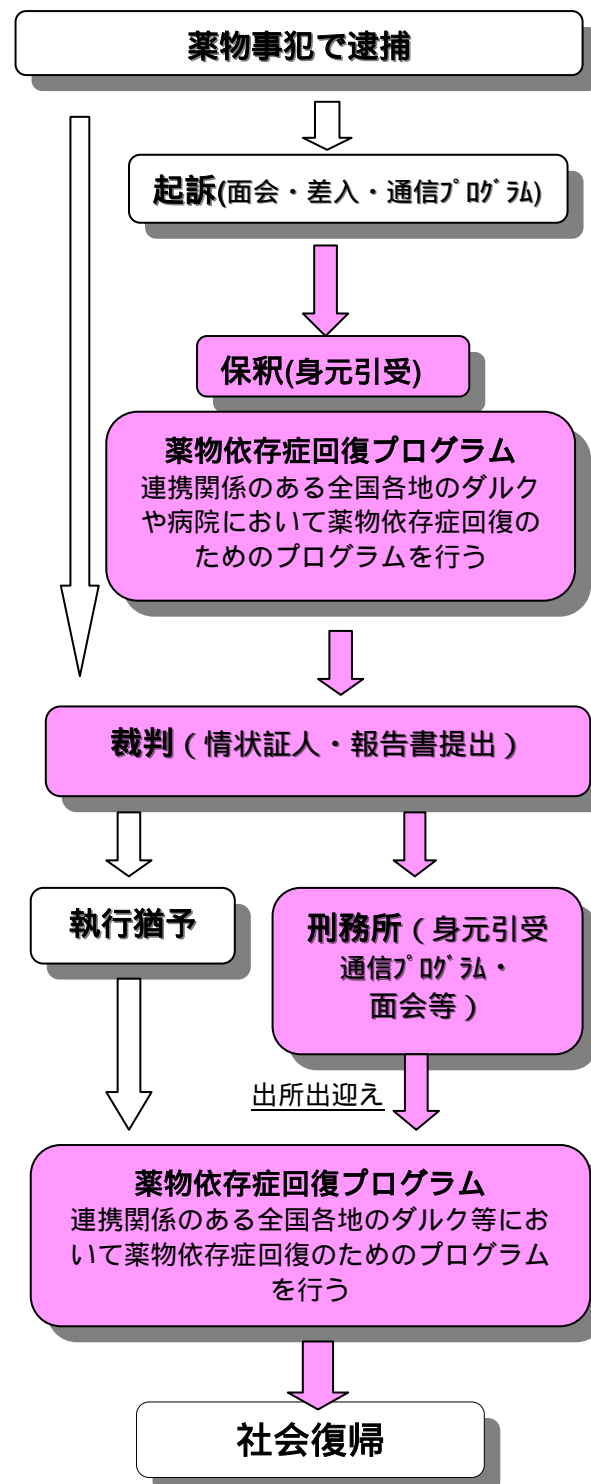
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方の司法サポートも行っています。(窃盗、横領、詐欺等)ご相談ください。

[費用:コーディネート契約料として一律20万円。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

[お問合せは東京本部まで]

**アパリの支援**



**<アパリ・家族教室>**

日時	テーマ	ファシリテーター
11月7日(月)	私の境界線	町田 政明
11月21日(月)	自分の回復	体験談 鈴木 智久 (日本ダルク アウェイクニングハウス)
12月5日(月)	過保護と共依存とは どう違う?	町田 政明
12月19日(月)	家族の否認	町田 政明
1月16日(月)	アルコール依存症だった 弟の死	体験談 尾田 真言(アパリ事務局長)

[対象] 薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

[日時] 第1・第3月曜日18:30~20:30

[場所] アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)

[内容] ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。 【予約】不要です

**来年より家族教室は祝日お休みいたします。**

**<個別相談・カウンセリング>**

[対象] 薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など

[料金] 45分 9,000円 【場所】 アパリ東京本部

[カウンセラー] 町田政明(元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープヒル代表、寿アルク理事)

[予約] アパリ東京本部 03-5830-1790